

2013年10月9日～10月19日まで掲載

# いま 子どもたちは 歩け歩け



号砲とともに学校を飛び出していく山梨県立甲府第一高校3年生の男子生徒=5日、榊原織和撮影



### ◆キーワード 甲府一高の強行遠足

1924(大正13)年、自分の体力に応じて歩けるだけ歩くことで「剛毅(ごうき)不屈の精神」を養おうと始まった。伊勢湾台風などでの中止を除き、今年で87回目の伝統行事となった。第2回から第36回(1961年)までは24時間で行けるところまで行き、65年からは男子が長野県小諸市までの約100キロ(女子は当時32キロ)に。2002年に長野県小海町で女子生徒が危険運転の車にはねられて死亡、遠足の廃止が議論されたが、遺族の意向も受け、コースを短縮して存続させた。

奥田正直校長は「存続を決めた時から、安全を最優先に将来的には小諸に戻す方向で考えてきた」。距離は段階的に延ばし、男子は今年、小諸まで100キロを超える伝統のコースの復活に踏み切った。

## 1 限界まで行きたい No.599

上り坂を曲がりきると、その向こうにもっと急な坂が、壁のようにせり上がって見える。9月初め。山梨県立甲府第一高校1年の大平稜君(16)は、JR小海線の甲斐大泉駅(同県北杜市)に続く自宅近くの県道を走って上り始めた。全校生徒が参加し、同校が毎年行う「強行遠足」のコースでもある。駅まで約4キロで300メートルも上る。駅を越えても、さらに急な勾配が約4キロ続き、標高は1400メートルを超える。「陸上部だし、8キロぐらい走るのには慣れているはずが甘かった」。走っても、「あれ、まだ先がある」の連続。足を前に出すことしか考

えられない。自宅に帰ると放心状態で、食欲もなくなった。

先輩たちはこんなコースを走っているのか——。しかも今年から男子は距離が約30キロ延び、学校のある甲府市から長野県小諸市までの約105キロに延びた。でも、これを走るために一高に入学したんだ、とも思う。

大平君が初めて一高の強行遠足を知ったのは、小学4年のころ。10月になると、自宅近くに、強行遠足への協力を求める看板が立った。そのころは、「何やってんだろ、この人たちは」としか思っていなかった。

それが、中学2年の時「走ることに目覚めた」。中学でスピードスケートに打ち込んだが、夏は陸上トレーニングを欠かさない。そこで走るうちにタイムが伸び、楽しくなったのだ。

80回を超える戦前からの伝統で、一高生は強行遠足で自分の限界に挑戦してきた。自分も一高に入って、「限界」を知りたい。その頃から、志望校を一高に決め、勉強に打ち込んだ。

入試前の今年1月。強行遠足の男子の距離が約105キロに延びたとラジオで知った。記念すべき年に入学できる。思わず「おおっ」と歓声を上げた。

「入学する気が失せました」。大平君と同じ陸上部の1年小沢勇士君(15)は対照的だ。大平君と同じように、受験勉強中にニュースを聞いた。元一高生の母に「お前じゃ走りきれないよ」と言われ、「かもねえ……」と返すのがやっとだった。

陸上部でも、専門は短距離。部活でも、基本的には大平君ら長距離の選手とは別メニューだ。いざスタートしても、大平君が試しに走った甲斐大泉の上り坂までも、たどり着けない気がする。「正直、怖いんです」

入学からしばらくは、強行遠足のことを考えないようにしていた。だが、夏休みが終わりに近づくにつれ、何か準備しないと、という気がしてきた。「他の高校と比べても、いい伝統だな、とは思ってます」。8月下旬。小沢君は一大決心をして、「練習」に取りかかった。甲府市北部の溪谷・昇仙峡の奥にある祖母の家まで、自転車で行ってみることにしたのだ。

甲斐市の自宅から、約14キロ。途中には未舗装の道もあり、坂道が続く。こんなにきついとは。でも、強行遠足で走る坂はこんなものではなく、しかもずっと続くらしい——。

大平君にも「あの坂はなめない方がいい」と言われた。でも、昇仙峡の坂を上り切ったことで「どうせやるなら完走したい」という気持ちが出てきた。

2学期に入り、体育の授業は「30分間走」ばかりになった。本番直前の2日の授業では、小沢君は強行遠足で走るペースを守りながら、ひたすら走り続けた。



「ここまできたら行けるところまで行ってみたい。夏から『数ミリ』はやる気が出たかな」

10月5日午後2時。スタートを告げる号砲が響いた。学年ごとに生徒が校門を飛び出す。限界に挑戦する旅が始まった。

男子は24時間で105キロ、女子は9時間で43キロを走る「強行遠足」。長い道のりから、生徒は何をつかむのだろう。

(河原田慎一)

写真：持久走の授業で走る小澤勇士君(左)  
いずれも甲府市美咲2丁目

## ■伝統校で続く行事／時代に合う目的探る

長距離を歩き通す「遠足」は、伝統校を中心に全国各地で行われている。

全校生徒の男女が2日間かけて約70キロを歩く水戸第一高校(水戸市)の「歩く会」は、恩田陸の小説「夜の

ピクニック」のモデルになり、映画化もされた。多くは「質実剛健」や「文武両道」といった校風を表す行事として、伝統を守り継いできたものだ。

一方で、ただ「つらい」だけの行事では、今や生徒や親の理解を得られない、という指摘もある。体育教育の歴史に詳しいびわこ成蹊スポーツ大の新井博教授は、自分の体を知ってどんなケアが必要か考え、準備すること▽生きる力や、社会的な適応能力を養うこと——といった「現代的で合理的な意義」が求められている、と話す。新井教授は「長距離を人生にたとえて『助け合い』を意識させるなど、時代に合った目的を持つことで続いているのだろう」とみる。

### ■「強行遠足」を行っている主な学校

- ・北見北斗高校(北海道) 男子71キロ、女子41キロ
- ・水戸第一高校(茨城県) 男女とも70キロ
- ・新城高校(愛知県) 学年ごとにコースがあり、今年は19～31キロ
- ・大淀高校(奈良県) 1、2年生のみ、32キロ
- ・大阪教育大付属高校天王寺校舎(大阪府) 「自治会(生徒会)」が企画する1、2年の行事。毎年コースが変わり、約80キロ

## 2 受験も間近、なぜ走るのか No.600 10月10日



放課後に自習する花井貴大君(左)、河西秀紀君(中央奥)、安藤雅経君＝甲府市美咲2丁目の甲府第一高等学校

男子は24時間をかけて105キロを走る、甲府第一高校(甲府市)伝統の「強行遠足」が5日、ついに始まった。

3年生にとっては、最後の年に距離が昨年の75キロから約30キロも延びた。毎日の運動量も落ちている。それに甲府一高は進学校で、入試に向けた勉強を本格化させなければならないのに。元野球部の花井貴大君(18)は「(大会前の)持久走の授業で、何のために走ってた、とつねに自問自答してました」とつぶやいた。

花井君は教員志望で、地元の国立大を目指す。朝5時半に起きて数学の勉強をし、学校の帰り道に県立図書館で自習。

家でも風呂で英語の発音を練習し、寝る前に携帯で政治経済の正誤問題アプリをする。「強行遠足は一高の伝統を感じる部分だけど、学校とOBは、勉強よりもこればかりに力を入れてる感じがする」とも正直、思う。

一緒に走った河西秀紀君(17)も、元野球部。消防士の試験に合格したが、センター試験を受けるつもりで、勉強を続けている。「24時間あれば、勉強もだいぶ進むと思うけどねえ。走りきるための頑張り、使うところが違う」。安藤雅経君(18)は数少ない就職組だが、電気関係の資格取得の勉強に追われている。「最近はや完走率が高い。どういった意味で『強行』なのか、今回、改めて考えさせられた」と前向きだ。

安藤君にそう言われて、河西君も考えた。「消防士になれば、もっときつい場面もある。それに比べれば強行遠足は自分との闘いで、自分を強くないと人を助けられないのでは」5日午後、一緒に走り出した3人は、最初の検印所がある韭崎(山梨県韭崎市、学校から11キロ)に続く緩やかな上り坂を、笑顔で駆け抜けた。

だがその後、左足首の関節を痛めていた花井君は、54キロ地点の野辺山(長野県南牧村)でドクターストップ



プ。花井君は「悔しさはないというふうになる。勉強の方が楽だけど、受験もこれでたぶん頑張れる。この借りを受験で返したい」。強行遠足で、受験生なりの「意味」をつかんだ。

(河原田慎一)

### 3 トップでゴール、先輩と一緒に No.601 10月11日



トップでゴールする宮本聖君(中央)と村松和十君(左)＝長野県小諸市

甲府第一高校(甲府市)の「強行遠足」で、男子生徒が学校をスタートしてから約14時間後。先頭を走った2人は、人通りのない真っ暗な長野県小諸市の街中を走り抜け、6日午前4時過ぎ、両手を高く上げて一緒にゴールテープを切った。

2年の宮本聖(せい)君(16)と3年の村松和十(かずと)君(18)は、ともに陸上部。宮本君は満面の笑顔にも、「予定通り。一つのことをやり遂げるには、準備が大事だと学んだ」と冷静だった。

40キロぐらいまでは、村松君が後続に40分の差をつけて独走していた。

それでも宮本君は、検印所ごとの自分の通過予定時刻を書いた紙を見ながら「大丈夫です。必ず追いつきます」と不敵な笑みを浮かべていた。

宮本君は昨年、悔しい思いをした。友人の志村佳太君(16)と2人で歩いていたゴール直前。後ろから別の陸上部員が猛然と追ってきた。2人は駆けだしたものの、宮本君は志村君に「このまま一緒にゴールして、じゃんけんで順位を決めればいいんじゃないかね?」と持ちかけた。だが志村君は「いや、ちゃんとしたい」。スパートをかけた志村君に追いつがったが、引き離されて終わってしまったのだ。

「今年は、より上を目指したい」。事前に立てた予定通り、70キロ地点のあたりで村松君を抜き去ったが、その15キロ先で再び村松君が追いついた。並んで走りながら「最後に抜こうかな」と思ったが、体が思うように動かない。宮本君は、お互いに励まし合って全力を尽くし、一緒にゴールすることに決めた。

部活の先輩の村松君とは個人的に話したことはほとんどなかった。気遣いながら、「好きな人いるんですか」と走りながら聞いてみた。「ふざけたことばかり話して、まともに答えてくれなかったですけど」

実は村松君はその時、意識がもうろうとしていたという。「宮本君がいろいろ質問してくれたのに『あ、そうだね』しか言えなくて。申し訳ない」。宮本君は「先輩との最後の思い出をつくれた。友達も励ましの手紙をくれたし、ゴールできて誇らしい感じ」と充実した表情で振り返った。(河原田慎一)

### 4 女子も105キロ走りたい No.602 10月12日



女子の7位で完走

した梶谷紗代さん=長野県小海町

甲府第一高校の強行遠足では、女子もフルマラソンを超える43キロを9時間以内に走る。

一昼夜かけて105キロを行く男子と同じコース。最高地点は標高1400メートルを超える過酷な道のりだ。だが2年の梶谷紗代さん(17)は昨年、完走しても「限界」は感じなかった。「男女で体力差はあるけど、105キロとなると気持ちの問題。女子でも行けるんじゃない、って」

昨年の強行遠足前、意を決して体育の先生に「女子も(当時の男子と同じ)75キロ走りたいんですけど」と、言ってみた。でも「安全上無理だね」とあっさり却下。「それならもっと上に」と、校長先生に直訴するタイミングをうかがっていた。

5月。校長室の掃除中に奥田正直(まさなお)校長(59)に訴えた。「先生、女子も夜歩いちゃいけないんですか。100キロ走りたいんです」。奥田校長は「うーん」となった後「無理ですね」と答えた。「希望者だけでも」と食い下がったが、だめだった。

実は、奥田校長の元には、ほかの女子生徒からも「直訴」が届いていた。「先生、一高は男子校ですか」「先生も周りも、(男子の行き先の)小諸のことしか考えてないじゃないですか」。言われてみると、確かにそうかもしれない。でも女子は昨年約30キロから43キロにのびしたばかり。奥田校長は「気持ちは分かるが、安全確保と社会通念上、難しい」と話す。

なぜ、そんなに走りたいの? 梶谷さんは「105キロは未知の世界。夜しか見られない光景の中、修学旅行気分友達と『暴露大会』なんかもしたい」。ただ、賛同者はそれほど多くはないようだ。「周りに『走りたいよね』と言うと『絶対嫌われるよ』と言われました。でも、行けるところまで行く、という一高の伝統を尊重してもいいじゃないですか」

梶谷さんは今年、約6時間で完走。「昨年より疲れたけど50キロは行けます。おしゃべりしながら、男女で盛り上がりたい」と、少し物足りなさそうだった。奥田校長は、梶谷さんらの意見を受けて、12月の職員会議で女子のコースについて議論するつもりだ。(河原田慎一)

## 完走願い「本命」にお守り No.603 10月16日



照れながら「本命」のお守りを渡す井上知優さん(右)

甲府第一高校の「強行遠足」には、完走への挑戦以外にも大切な「伝統」がある。

男子の出発前日の4日。3年の井上知優(ちゆう)さん(18)は、赤いチェックの布で手作りした「お守り」を、坂本翔(かける)君(18)に手渡した。男子の完走を祈って、赤いチェックは「本命」のしるし。中にイチゴ味のアメとばんそうこうを入れ、行き先を小さな紙に距離のキロ数分、書く習わしだ。今年は行き先が105キロ先の長野県小諸市なので、「小諸必着」と105回。ちなみ

＝甲府市美咲2丁目の甲府第一高校

に「義理」には「必着」ではなく「到着」と書く。「一高にはバレンタインが2回ある」と言われるゆえんだ。

3年の藤原はなさん(17)は昨年、意中の男子に校舎の階段で「早くしまって」と押しつけて、逃げた。強行遠足の後、その男子からメールが来た。「本気なの?」「そうだよ」と返事をして交際が始まった。藤原さんはその彼に今年も「本命」を用意。だが出発時に渡そうとしたが、受け取ってもらえなかった。「ちょっと考えられない…。藤原さんは落ち込んだまま、翌日の女子の部を友人5人で歩いた。彼からのメールに気づいたのは、30キロほど歩いた頃だ。「何か恥ずかしかったのかも」。やっぱりそうだったんだ。文面を見て「めっちゃ、やる気が出ました」。藤原さんは友人と手をつなぎ、笑顔でゴールした男子からのお返しは、88キロ地点の臼田(長野県佐久市)で配られるリンゴだ。かつて検印所の場所を提供した依田トミ子さん(故人)が、一高生のために用意してくれた。男子はこのリンゴをお守りをくれた女子に渡し、女子がアップルパイを焼いて一緒に食べる。今年是小諸コースが復活し、依田家の協力でリンゴも復活した。

「小諸に行く」と宣言した坂本君は、途中で熱が出てリタイア。「本当に申し訳ない」とうなだれる坂本君に、井上さんは「自分なりに頑張ったなら、それでいいです」。今年は、完走した女子にも学校からリンゴが配られた。「お母さんにアップルパイを焼くので、一切れあげようかな」(河原田慎一)

## 北海道から走って交流

No.604

10月17日



甲府第一高校の沢貴音さん(右)と一緒に走る北見北斗高校の平賀鈴菜さん＝長野県南牧村

甲府第一高校の「強行遠足」には今年、北海道の北見北斗高校から4人が参加した。北見北斗高校にも男子71キロ、女子41キロの強行遠足があり、今年で81回を数える。両校は1992年に交流を始め、以来、相手高の生徒を招き合っている。

2年の平賀鈴菜さん(17)は途中、甲府一高の2年沢貴音(たかね)さん(17)に「走る?」と声をかけて並んだ。「山梨の高校生は夏服着ててびっくりした」「ゴールしてから体重量ったら減ってるかも」。畑と牛しか見えない、平らな北見のコースと違って、坂がきつい。でも、川や山の景色がきれいで、北海道と山梨の違いを話して気も紛れた

3年の石井梨紗さん(17)も「高いところから見る景色が、新しい発見だった」と話す。昨年に甲府から北見北斗の強行遠足に参加した生徒と再会。ここでも、北海道のご当地話をした。「『なまら』って言うの?とか聞かれて。短い時間だったけど、深い交流ができました」

北見よりも30キロ以上長い男子は、急坂に苦しんだ。「歩き続けるのは精神的につらいから、走ることにしませんか」。あと20キロ。2年の鈴木亮祐君(17)は、一緒に歩いていた4人に提案した。下り坂だが、ひざが「やめてくれえ」と悲鳴を上げていた。歩いても走ってもつらいが、走れば早くゴールできる。完走した時の達成感を想像しながら、マイナスをプラスのイメージに変えることばかり考えた。「進学校で似てるけど、一高は北斗以上にぎやか」と前日に話していた3年の大西啓人(ひろと)君(18)。あと18キロのところまで足が前に進まなくなった。「完走しなかったら北見に帰れない」と不安にかられていると、一緒に走った一高の3年安藤雅経君(18)が明るく励ました。北見北斗の4人は結局、全員が完走した。



大西君は「強行遠足は、順位ではなかった。一緒に走る人がいて耐えられる。受験にも、これからもつながるいい経験だった」。安藤君とは連絡先を交換し合い、「また会えたらね」と声をかけあった。

(榊原織和、河原田慎一)

## 最後尾、励ますのは卒業生

No.605

10月18日



小野真彦君(右端)と一緒に歩く前田太一さん(左から2人目) =長野県小海町

甲府第一高校の強行遠足で、105キロを歩く男子の制限時間は24時間。途中18カ所の検印所や給水所にも通過制限時刻があり、その時刻までに到着しないと、その先には進めない。最後尾の生徒と一緒に歩くのは、卒業生の役割だ。今年3月に卒業した前田太一さん(18)は、71キロ地点の松原湖(長野県小海町)から次の小海(同)まで約4キロを担当した。前田さん自身、昨年の強行遠足の松原湖で最後の1人になった。最後の強行遠足を完走したいと思ったが、足が動かない。

その時も、2人の卒業生が後ろについて、ずっと話しかけてくれた。「しゃべる元気がなかったはずが、疲れが飛んじやった」。前田さんは昨年のゴールの小海に、制限10分前に到着。この区間がどれほどつらいか知っているからこそ、この区間の追走スタッフに手を挙げた。

6日午前6時8分。松原湖の締め切り時刻になった時点で、まだ歩く意志のある最後尾の生徒と出発した。最後の1人は2年の小野真彦君(17)。疲れていて表情も硬い。並んで歩き始めたが、なかなか話しかけることができない。

小野君は、彼女からもらった赤いチェックのお守りを落としてしまったことに気づいた。さらに落ち込む小野君。何と声をかければいいのか。だろう。

それでも、少しずつ会話の糸口を探る。「お守りは誰にもらったの?」「同じアカペラ部の彼女から……」。小野君の表情がほぐれてきた。

制限15分前の時点で、小海まであと2キロ。歩いていたら間に合わない。みんなで走り出した。途中で小野君が前の生徒を追い抜き、前田さんは追い抜かれた生徒と歩くことになった。

前田さんと歩いた生徒は、時間切れでバスに乗ることになった。後輩の助けになったのだろうか。「もっと声をかけてあげればよかったなあ」

小野君も小海まであと500メートルのところ、時間切れに。悔しくて、小海の検印所で泣いた。「でも先輩と一緒に、雰囲気をよくしてくれてうれしかった。来年は最後まで歩きたい」

(榊原織和)

## 何があっても立ち止まらない

No.606

10月19日



手をつないでゴールする甲府一高の生徒たち＝長野県小海町

甲府第一高校で、自らの限界に挑戦する男子105キロ、女子43キロの強行遠足。参加した生徒たちは、この伝統行事を終えて、何を学んだのだろう。

トップでゴールした3年村松和十君(18)は、完走の直後でも受験勉強のことが頭をよぎった。「今日から勉強で間に合うかどうか…でも、今日みたいに粘って勉強できる気がする」。

2年の志村佳太君(16)は、検印所で村松君から「寂しいから追いついてくれ」と言われていた。先輩には追いつけなかったが、「自分の気持ちが折れないように、相手の気持ちを折れさせないように。105<sup>キ</sup>は厳しかったが、そう考えながら楽しく来られた」と、ほっとした表情で振り返った。

昨年より距離が30<sup>キ</sup>延びたことで、男子の完走率は昨年の72%から48%に下がった。完走した3年の安藤雅経君(18)は「何も見えない上り坂を走っていて、3年目で初めて、途中で『やめたい』と思った」。安藤君らと走っていた3年の花井貴大君(18)は、足首を痛めてグループから離れ、54<sup>キ</sup>地点の野辺山(長野県南牧村)で、ドクターストップになった。「知らなかった人とも話して仲良くなれた。悔しいけど楽しかった」真っ暗な坂道で、3年の河西秀紀君(17)は夜空を見上げながら1人で歩いていた。

満天の星から、時折流れ星が落ちる。「俺、このきれいな夜空の下で何しているんだろう、つて。『無常観』を感じました」。強行遠足の意味を考えてみたが、答えはでない。「つらさをどうやって乗り越えるか、ということなんですかね」

北見北斗高校から参加した石井梨紗さん(17)は、甲府一高の生徒は「強いな」と感じた。「何があっても立ち止まらない、ということを学んだ」

奥田正直校長(59)は、「卒業しても、それぞれの『強行遠足』は続く」と言う。「今分らなくてもいい。必要なものを背負って、歩ける限り歩くことが、生き抜く力になる」

(河原田慎一)